『桑実寺縁起絵巻』と慶寿院の結婚をめぐって（下）

小谷量子

［要旨］『桑実寺縁起絵巻』制作時の、三条西実隆・近衛尚通の動向と、京都における朝廷社会の絵巻制作および、鑑賞について検討した。三条西実隆は、既存の「桑実寺縁起」を架空の寺七光寺の話とし、下巻ではその話を後ろから前に戻し、元明天皇が桑実寺にやって来る場面を付けたした。

当時、京都は将軍不在で治安が悪化し、摂関家でさえ都を離れざるを得ない状況だった。近衛尚通は、京都と近衛家を守るため慶寿院を桑実寺にいる将軍義晴に嫁がせ、義晴に早期京都帰還を促そうと考えた。この結婚は義晴にとっても好ましいものだったが、摂関家の女性が近江の一寺院に嫁ぐことは前例がなかった。

そこで、尚通は将軍義晴に、慶寿院が自ら桑実寺に行こうと思うような絵巻制作を持ちかけたと思われる。絵巻の中で、主人公元明天皇（阿閇皇女）の宮殿は「源氏絵」の世界になっている。「源氏物語」に登場する女性たちは、現実の女性の「たとえ話」である。絵巻は過去の元明天皇の姿を借りながら、現実の慶寿院が桑実寺に行くことによって、桑実寺に太陽と月が揃うという「たとえ話」になっているのである。

絵巻は宝物で秘蔵される一方で、京都で天皇や公家が見ていたことが判っている。近衛尚通は絵巻制作の第一人者である。しかし、『桑実寺縁起絵巻』だけは制作に参加していない。これは将軍注文・天皇執筆の一流絵巻にしては、不自然なのである。この絵巻制作は、三条西実隆の個人的受注だったのではなく、朝廷として絵巻制作に臨んだとみてよいだろう。『桑実寺縁起絵巻』は恋文であり、慶寿院に見せることが真の制作目的であろう。この絵巻は、京都を守ろうとした義晴・慶寿院夫妻のスタートなのである。

［キーワード］桑実寺縁起絵巻、足利義晴、近衛尚通、慶寿院、三条西実隆

はじめに

『桑実寺縁起絵巻』（重要文化財）は、滋賀県近江八幡市安土町繖山にある天台宗の古刹桑実寺の由緒を描いた絵巻である。この絵巻は天文元年（一五三二）正月に、十二代将軍足利義晴の発願により制作され、同年八月十七日に桑実寺に奉納された。三条西実隆が詞書を創作し、絵は土佐光茂筆であることが、奥書及び『実隆公記』から明らかで、制作過程が詳細に判明する絵巻である。

筆者が「『桑実寺縁起絵巻』と慶寿院の結婚をめぐって（上）」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』二十五号、二〇一九年、インターネッ

ト公開）において、明らかにしたことをまとめておこう。

1、『桑実寺縁起絵巻』は、上巻が架空の寺七光寺建立の話であり、下巻は七光寺建立譚を後ろから前に逆転させ、桑実寺縁起とする構成になっている。つまり、上巻と下巻は同じ話が繰り返され、円環状に話が上巻最初に戻る。

2、上巻と下巻で異なっているのは、上巻では病気のため父天智天皇に心配をかけた阿閇皇女が、下巻では成長し元明天皇となって、自らの意思で桑実寺にやってくる。すると、雉の番いが桑実寺に揃う。すると、日光・月光菩薩が桑実寺に飛来し、桑実寺が完全な姿になるという部分である。この部分がこの絵巻の主題である。

3、この絵巻の主人公は天智天皇第四皇女阿閇皇女（後の元明天皇）である。天智天皇皇女で天皇になったのは、持統天皇と元明天皇である。著名な持統天皇ではなく、聖武天皇成長までの中継ぎであった元明天皇が主人公に選ばれたのは、元明天皇が妹の乙姫であり、琵琶湖の守護神弁財天と結びつけるためである。

4、絵巻の時代設定は大津京～奈良時代だが、七光寺・桑実寺は室町期が描かれ、阿閇皇女の寝室は源氏物語の世界である。さらに、下巻に描かれた桑実寺は、上巻巻頭の扶桑伝説世界、観音正寺の現実世界、阿閇皇女の寝室の源氏物語世界が一つに融合した世界として描かれている。つまり、「過去と現在、物語と現実の融合」になっている。

5、古代天皇の蒲生行幸で先ず思い起こされるのは、天智天皇の蒲生野遊猟である。『万葉集』に、天智天皇が主催した蒲生野遊猟における額田女王と元夫大海人皇子の相聞歌「茜射す紫野ゆき標野ゆき　野守は見ずや君が袖振る」「紫草のにほへる妹を憎くあらば　人妻ゆゑに我恋ひめやも」（万葉集巻一、二十・二十一）の著名な歌がある。この絵巻は、額田女王と大海人皇子の相聞歌を連想させる。一方、元明天皇の近江行幸は記録がない。[1]

6、この相聞歌において、蒲生野遊猟の主催者である天智天皇は登場しないが、登場しない天智天皇の存在に重要な意味がある。また、天智天皇は絵巻上巻で、寺建立を定恵に指示するこの物語の発願者だが、七光寺落慶法会に出御していない。さらに、上巻の主要登場人物の中で、天智天皇のみが下巻に登場しない。このように、天智天皇は相聞歌においても、絵巻においても物語の発端を指示した人物でありながら、表舞台に登場しない黒幕である。

7、上巻の天智天皇・定恵・阿閇皇女・薬師如来は皆、法会に参加しないか、招かれてやってくる。一方下巻では、薬師如来も日光・月光菩薩も、定恵も元明天皇も、自らの意思で桑実寺に来る。

8、この絵巻は「後から寺に来る」がキーワードである。上巻では本尊・願主不在の法会が盛大に行われ、本尊の薬師如来が「後から寺に来て」話が終わる。下巻では、薬師如来が桑実山に来ると、定恵が「後から来て」桑実寺を建立する。そして、元明天皇が「後から寺に来て」桑実寺瑠璃石を拝む。さらに、元明天皇に近侍すべき傘持ちがなぜか遅れ、「後から寺に来る」。元明天皇が瑠璃石を拝むと、桑実山にいる雉の許に、もう一羽の雉が「後から来て」つがいが揃う。すると、薬師如来に近侍すべき日光・月光菩薩、十二神将が「後から桑実寺に来て」話が終わる。

9、絵巻詞書は、絵巻としては異例といえる難解な仏教語・漢語を駆使しており、公家などの知識人でないと読みこなせない。また、桑実寺は近江の山岳寺院でありながら、参詣者は公家の女性と、稚児・弟子を連れた僧侶であり、室町期の公家の女性が都で生活する空間と酷似して描かれている。この絵巻は公家の女性のために制作されたのではないだろ

うか。

このように、この絵巻は多くの不自然な点がある。

①なぜ三条西実隆は同じ話を繰り返し、しかも下巻では上巻の話を逆転させたのだろうか。

②なぜ蒲生野へ行幸したことが明らかな天智天皇ではなく、近江行幸の記録がない元明天皇が桑実寺に来る話にしたのだろうか。

③なぜ土佐光茂は阿閑皇女の寝室を源氏絵風に描き、参詣者には室町期上流公家女性を中心に据え、桑実寺を室町期都の公家女性の生活空間に描いたのだろうか。

④なぜ七光寺の法会に願主である天智天皇を描かなかったのだろうか。

⑤なぜ桑実寺に飛来した薬師如来に、日光・月光菩薩、十二神将を従わせず、梵天・帝釈天、八童子といった本薬師如来の脇侍ではない神仏を描いたのだろうか。

⑥なぜ詞書を絵巻としては異例ともいえる非常に難解な文章にしたのであろうか。

つまり、この絵巻は、勧進・布教のための平明な詞書・構成ではなく、公家などの知識階級でなければ読みこなせない難解な文章と複雑な構成であり、鑑賞者に読み解きを求める謎解きになっているのである。しかも、女性向けに描かれたと思われる。

天文元年の時点で、義晴身辺に公家の女性はいない。しかし、この絵巻奉納の一年九ヶ月後に、近衛尚通の五女、慶寿院（本名不明のため出家後の名で表記）が、都から桑実寺にいる足利義晴に嫁いでくる。そして、慶寿院の縁談が天文元年から動き出していると思われるのである。この絵巻は、慶寿院に見せることが真の目的だったのではないだろうか。

この結婚後の義晴・義輝政権期において、近衛一族が守護間の和平調停役を務めるなど、幕府政治上大きな発言力をもつようになる。また、将軍の京都没落には、近衛一族も、将軍と共に京都を退去し、将軍家と近衛家は外戚という以上に一体化し、「足利―近衛体制」とさえ言われる[2]。しかし、なぜ将軍家と摂関家の前例のない結婚が行われたのか、なぜ近江の桑実寺まで慶寿院が嫁いで行ったのか、その理由と経緯は慶寿院の父近衛尚通の日記にも記されておらず明らかではない。

なお、島谷弘幸氏は『実隆公記』に多くの絵巻披見・制作の記事があることを明らかにしている[3]。つまり、代表的絵巻や新調された絵巻は、公家が見ているか、制作に関わっており、その記録が都に残されたのである。『桑実寺縁起絵巻』制作も朝廷社会における絵巻制作・鑑賞という枠組みで考える必要がある。

そこで本稿は、『桑実寺縁起絵巻』と慶寿院結婚との関連について検討したい。慶寿院結婚と、その直前に制作された『桑実寺縁起絵巻』は、関係があると思われる。『桑実寺縁起絵巻』制作過程を分析することで、その後の幕府政治に大きな影響を与えたこの結婚が、どのような経緯で実現したのか明らかになるであろう。

なお、以下『桑実寺縁起絵巻』先行研究の見解は特に断らない限り、亀井若菜氏「桑実寺縁起絵巻について」（『表象としての美術、言説としての美術史』ブリュッケ、二〇〇三年）による。『桑実寺縁起絵巻』は『続日本絵巻大成十三』『続日本の絵巻二十四』（共に中央公論社刊）に所収されている。あわせてそちらを参照していただければ幸いである。

第一節　『桑実寺縁起絵巻』制作の経緯

まず、絵巻制作の経緯について考えたい。この絵巻制作は、享禄五年

（天文元年・一五三二）正月二十一日に、三条西実隆が義晴の依頼を受けたことに始まる。『実隆公記』には次のように記されている。[4]

廿一日　飯川山城入道以福有状、〈十七日状上池院伝之〉桑実寺縁起可被図絵、仮名□（絵カ）詞可書進之由柳営仰云々、此本無正体之物也、頗難義事也、為之如何、

飯川山城入道以福から書状が来た。十七日付けの書状であり、上池院が持ってきた。桑実寺縁起を絵巻にしなさい。絵詞を書き進上するように将軍が仰せということだ。この本は正体無いものである。頗る難義なことである。どうしたものだろうか。

飯川山城入道以福は設楽薫氏[5]、山田康弘氏[6]によれば、義晴の父義澄が近江に没落した際供奉した飯川山城守国資であり、義澄没後は赤松に預けられていた義晴に近侍し、義晴将軍就任と共に幕府に復帰した。それ以後も常に義晴身辺に仕え、義晴にとって義澄以来の家臣の中でも、最も信頼する人物であった。国資（国弘と改名カ）は享禄三年頃出家し「以福」と名乗り、天文初年頃に没したと推測される。[7]

また、『実隆公記』大永八年（一五二八）の紙背文書に、大永七年十月二日の三条実香書状がある。実香が近江坂本に滞在していた義晴を訪れた時の様子を伝えた書状で、次のように飯川が登場する。[8]

坂本之儀非指大儀候、則対面候、大館父子（大館伊与守常興・晴光）於武家参会、内々貴殿（三条西実隆）も御礼も被申度御気此事候へ共、所々悉以人々押領仕候、其上又御腫気久敷御煩候間、乍御無念無其儀候、自然儀老臣伊与（大館常興）ニ可申試候由被仰候由申候所へ、又伊香（飯川）山城来候、又それにも自然儀御取合申候へと申て候、

実香は坂本で義晴に対面し、その後大館常興父子に御殿内で会い、「実隆も坂本に来たかったのだが、所領が押領され金銭的に手詰まりである上、腫れものを患っているため無念ながら来ることができなかった。『もしものことがあったら老臣の大館常興に伝えるように』と将軍が仰せでした」と、話していたところ、飯川山城がまた来て、「もしものことがあったら私にもお知らせください」と言った。

飯川は、実香が義晴に対面した際、その場にいたと思われ、申次を務めていたと考えられる。後継の飯川信堅も申次である。[9]飯川は走衆を務める家であるが、[10]義晴の身辺に幼少のころから仕える最も信頼する存在で、冷泉為広を播磨でも自邸に招く等、文芸の素養もあった。[11]

また、飯川は実隆とも親しく、大永八年五月には、実隆邸で伊勢物語講釈を受け、義晴が坂本に下る際には暇乞いに来ている。[12]大永二年四月に、実隆が義晴の命により三十六歌仙絵和歌を進上した際、飯川国資は義晴の使者として実隆に段子を届けていることから、実隆担当申次であったと思われる。[13]

さらに、飯川は近衛尚通とも親しい。例えば大永八年二月三日、東寺の戦いが開陣するとまもなく近衛邸を訪れている。四月にも近衛邸で種々世上のことを雑談している。四国勢と義晴の和睦の件であろう。五月に再び義晴は坂本へ退去するが、そのことを近衛尚通に伝えたのも飯川であった。二十七日には近衛邸に暇乞いに来ている。[14]このように義晴の動静を尚通に伝えているのは、単に親しいという理由ではなく、近衛家担当申次であったと思われる。

つぎに、上池院について検討したい。上池院（坂光国、紹胤）は医者

で、義晴の侍医である。[15] 義晴は大永六年、後柏原天皇の病が重くなった際、上池院を推薦し、それまでの竹田法印等から上池院に治療役が交代した。この上池院は父の坂定国（龍護）である。このように、上池院は先代から義晴の信頼が厚い医者である。

また、近衛尚通とも親しく度々近衛邸を訪れている。例えば実隆に絵巻依頼の書状を渡した近辺の時期をみると、享禄四年正月二十日、七月二十日、十月十日、天文元年正月二十七日に近衛邸に来ている。正月と七月は新年と八朔の挨拶であろう。十月は尚通が上池院に法楽詠を遣わし、上池院が短冊を持ってきたもので、尚通は重ねて次第裏書等を書遣わし、翌日上池院が薬二十を贈っている。上池院は医者としてのみならず、文芸面でも尚通と交流があった。「次第裏書」は、何らかの順序・段取りなどを証明または指示した文書だと思われる。

大館常興は義晴の重臣で、御内書の副状や大名への書状も発給している。三条実香の書状でも、もし実隆の病状が重くなったときは、常興に伝えるよう義晴が指示しているように、重要な事柄は常興が取り仕切っていた。しかし、絵巻依頼は飯川山城入道からの依頼であり、幕府重臣の依頼ではなかった。しかも、書状は幕府の使者ではなく、上池院に託されたものだった。

義晴身近に幼少期から仕える申次の飯川山城入道の書状であったこと、依頼の書状は幕府の使者ではなく、おそらく正月の挨拶に来たのであろう外部の人間に託されたものであったことから、絵巻制作依頼は幕府として正式に依頼したものではなく、内々の依頼であったと思われる。先行研究の解釈のように、四国側を調伏し、天皇と共にあることによって義晴が正統的地位にあると主張する政治的意図が絵巻制作の目的であれば、依頼状も護国安泰祈祷命令の御教書のように、幕府として正式な形で発給されるであろう。つまり、この絵巻は幕府としての政治上の理由から制作されたのではない。

この時代の書状の例からすると、飯川の書状は『実隆公記』に記されているように、「桑実寺縁起を図絵にされるべし、仮名絵詞を書き進らせるよう、将軍が仰せ出されました」といった簡単な内容の折紙だったのであろう。つまり、この時代の使者は重要な役割を担っている。書状は具体的で込み入った内容の事柄や、秘密に関する事は書かれず、詳細は使者の口上に任されていたのである。飯川の書状は渡せばそれで済むという内容ではない。現代においても依頼者からの手紙一本で、本を執筆できないことは明らかであろう。制作目的、注文者の意図、何巻に仕立てるのか等、細かい打ち合わせは欠かせない。実隆から質問したいこともあったであろう。こうした、細部の詰めは全て上池院に任されているのである。

さらに、この絵巻は後述するように青蓮院が文明十五年に制作した縁起を基に作られており、絵巻に豊浦周辺のあまり著名とは言えない地名も出てくることから、資料も併せて実隆に渡されたと思われる。それらの説明も上池院に任されているのである。

二月三日に実隆はこの複雑な構成の絵巻草案を書き終わっている。[16] つまり、上池院は偶然桑実寺を訪れ、単に書状を預かってきたのではなく、どのような絵巻を制作したいのか熟知していたといえるだろう。医者は不自然ではなく各家に出入りし、当主に会える。内々の使者には最適な人物なのである。

第二節　三条西実隆への依頼内容

次に、依頼を受けた実隆の反応を検討しよう。まず、実隆が詞書の基にした文明十五年青蓮院制作の塔婆供養文の内、桑実寺縁起に関わる部分を示そう。全文は「華頂要略附録」四十二巻、勧縁集[17]に収められており、『近江蒲生郡志』[18]巻七の桑実寺の項にも採られている。

爰此桑実寺者日域之佳名、弥陀之縁木也、自陰陽既判、天地開闢以降、三災不毀之霊地、四徳常住之浄刹也、然間、上宮太子（聖徳太子）当三十三年宝算刻千手千眼尊容安観音正寺焉、天智天皇答十二浄願之効験治第四皇女病疾創（玉フ）此桑実寺矣、求長寿得長寿者、響如応声、求富饒得富饒者、影似随形、凡厥役優婆塞者、攀富士之嶽当此砌拝於碧羅之天蓋、則今ノ繖山也、定恵和尚者銜天子之詔、従海中感於生身之医王、則此本尊也云々、観夫湖海半州湛兮横一面之琵琶、天女之浄土遮眼焉、聞又松風四方吟兮調数張之琴瑟、観音之秘崛満耳矣、峰有天楽岩梵天三銖之衣（非常に薄い天の羽衣）若箇辺（リナラム）、麓峠瑠璃石善逝（仏）千幅之趺（アナウラ）親是乎、

ここ桑実寺（扶桑）は、日本の佳（佳）[19]名、弥陀の縁木である。桑実寺は、陰陽が別れた天地開闢以来災いのない霊地で、四徳常住の浄刹である。聖徳太子は三十三歳の時、千手観音像を観音正寺に安置した。天智天皇が第四皇女の病気快癒により桑実寺を創建した。この桑実寺は、長寿・富貴など願いが叶う寺である。役行者は富士に登り、緑の天蓋を拝した。これは今の繖山である。定恵和尚が天子の詔を承り、海中より生身の医王が出現した。これが桑実寺の本尊である。湖海が琵琶のように横たわり、天女の浄土であり、松風が琴の音を響かす観音の霊地である。峰に天楽岩があり、梵天三銖之衣はこの辺りであろう。麓に瑠璃石があり、仏の足跡がある。

このように、『桑実寺縁起絵巻』で語られるのとほぼ同内容である。しかし、実隆は、「此本無正体之物也、頗難義事也、為之如何」と困惑しているのである。青蓮院の書いた縁起が、「正体無」ものとは言えない。そこで先行研究は「正体無」を、「既存の縁起がすぐに詞書にできるような文ではない」と解釈した。しかし、縁起が絵巻の詞書になるように当初から整っているはずはなく、且つ青蓮院の書いた縁起を見ると、実隆はほぼこの通りに詞書を漢文から仮名文にしている。

では、「此本正体無」とし、実隆をして「頗難義」と言わしめたことは何だったのであろうか。それは、青蓮院の縁起には無い部分、つまり実隆が創作しなければならない部分があったためであろう。そこで、実隆が創作した部分を探してみると、

①上巻：金烏・白兎が遊ぶこと。桑実寺縁起を七光寺建立譚にしていること。

②下巻：元明天皇が桑実寺に行幸してくること。日光・月光菩薩が飛来すること。

つまり、上巻はほぼ既存の縁起に準拠しているのである。しかし、実隆はこの桑実寺創建譚を、なぜか七光寺のこととし、下巻ではその創建譚を後ろから前に逆転させているのである。なぜ、同じ話を繰り返さなければならなかったのであろうか。

それは、繰り返しではない部分「都から元明天皇が自らの意思で桑実

寺にやって来る。すると、日光・月光菩薩が桑実寺に揃う」ことを描く必要があったためである。つまり、「元明天皇が自ら桑実寺に来る→雉の番いが桑実寺に揃う→日光・月光菩薩が桑実寺に揃う→不完全だった桑実寺が完全な姿になる」という部分が実隆の創作のポイントであり、主題なのである。

なお、下巻第二段では、元明天皇が瑠璃石の薬師如来の足跡を拝み、「三十余り二の姿具へたる、昔の人の踏める跡ぞこれ」と歌を詠んだとあるが、この歌は『拾遺集』二十巻、一三四五番に、光明皇后が山階寺（興福寺）で詠んだ歌として載る。また、薬師寺に現存する仏足跡歌碑の二番とほぼ同じ歌である。この歌碑は仏足石ができた天平勝宝五年（七五三）年頃作られたと考えられている。[20] 元明天皇が桑実寺に行ったというのは、実隆の創作であろう。

実隆に課された難題は、「都の高貴な女性が、自ら桑実寺に行こうと思うような絵巻を制作して欲しい」というものだったのであろう。実隆をして「此本無正体之物也、頗難義事也、これをいかんせん」と嘆かせるのも無理はない。

第三節　近衛尚通の動向

本節では、近衛尚通の動向を検証したい。永正～大永年間の近衛尚通は、細川高国らと密接な親交を持ち、家門維持に努めていた。しかし、高国没落後の近衛尚通は、それまでにはみられなかった行動をとっている。以下『後法成寺関白記』を追って行こう。なお、以下の第三～六節は、拙稿「上杉本洛中洛外図屏風注文者　近衛氏の生涯」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』二十三号、二〇一七年、インターネット公開）でも簡単に触れたので、重複する部分があることをあらかじめお断りしておく。

享禄元年（一五二八）二月五日、中坊を近衛邸に召し一盞を与えている。中坊は興福寺衆徒で細川晴元側の可竹軒周聡・晴元・柳本の取次を務める人物である。[21] 中坊は元々筒井氏の被官で、木澤長政の右腕であった。[22]

十三日には、尚通妻維子から義晴乳母佐子局に贈答品が送られた。佐子局は三淵晴員の姉で、義晴乳母である。『大館常興日記』紙背文書に「そのころ（高国存命の頃）御き、れいしきの御けちなともせい光院へ申候てなされ候つる、まして御ないしよなとの御事、せい光院（清光院佐子局）御そんち候ハてハにて御さ候」[23]と、義晴が在京中の将軍下知は佐子局を通じて行われ、御内書も佐子局が全て承知していた。享禄二年七月、下京地子を柳本賢治に申し付ける佐子局が申沙汰した奉書が出されていることから、[24] 京都退去後も同様の地位にあったことが分かる。

なお、享禄二年二月・同三年九月に、越後長尾為景は義晴から小袖や唐織物を拝領したが、大館常興とともに、佐子局が為景に書状を書いている。そして、返礼として将軍へ太刀・馬・万疋の他、常興に太刀・馬・二千疋が贈られ、佐子局には三千疋が贈られた。このように、常興と佐子局は義晴政権の重臣であった。[25]

尚通の日記には、義晴京都退去後も佐子局との音信が度々記録されている。[26] 佐子局は義晴が最も信頼する母親代りともいうべき存在だった。おそらく、義晴が播磨に預けられていた時期から義晴に近侍し、義晴を養育してきたのであろう。

享禄元年三月六日、佐子局より、三種三荷が維子に贈られた。五月二十八日、四国側と義晴の和談が成立せず義晴が坂本に動座した際、尚

通は輿を貸し、佐子局からその礼があった。六月六日には家臣の進藤を坂本に送り、佐子局に両種を送っている。さらに、六月二十三日には娘の正受寺が石山詣でに行き、坂本の佐子局への言伝、生帷・帯などを贈っている。尚通一家は佐子局と親しく音信する間柄であった。佐子局以外に近衛家と親しく音信している幕府重臣はいないので、佐子局は近衛家担当取次の重臣だったと思われる。

さて、七月三日、九里が堺へ下った際には、近衛家領・娘の継孝院領保護を固く申し付け、五日には六角家臣永原被官の高屋二位が近衛家領西院庄に入使している。この後も尚通は度々中坊や高屋、幕府奉行人松田亮致、六角被官永原重隆と連絡をとり、家門領維持に努めている。

享禄二年には、息が入室する大覚寺・慈照寺の兵三百人を家領桂庄の警護に派遣した。[27] また、島津勝久、[28] 大友義鑑、[29] 大内義隆、北条氏綱ら有力大名とも連絡を持ち、[30] 娘（正受寺カ、勝光院）を還俗させ北条氏綱の後室に入れた。[31] 島津勝久には、享禄三年十一月に「抑世上之風波不静之条、在京難叶侯、併頼芳助計侯」[32] と、在京が難しい状況であると、援助を求めている。その後も尚通は、細川持隆や、[33] 木澤長政、[34] 本願寺光教[35] と音信をするなど、情報収集・家門の維持に努めている。

享禄四年十二月十四日、堺から斎藤以康が上洛し、細川持隆・光照（勝）院からの返事を尚通へ伝えた。「晴元に堅く申し遣わした」というもので、二十五日に下京地子を晴元が中間に触れさせていることから、下京地子収納に関することであろう。これ以前の十二月二十一日に晴元側近茨木長隆もしくはその縁者と思われる者から炭が歳暮として贈られ、翌天文元年正月十一日、茨木三郎左衛門・弥五郎等が正月の挨拶に近衛家に来ている。

このように、『桑実寺縁起絵巻』制作依頼が実隆の許に届いた時期は、尚通が堺の晴元側と連絡をとって家領保護に努めていた時期であり、堺の情勢や晴元の意向を尚通は掌握していたと思われる。尚通時代の近衛家領は、近衛政家の時代と比べ、摂津・近江・美濃等の荘園は不知行になったところが多く、山城の五ヶ庄・桂殿が主要な所領であった。[36] 慶寿院の結婚は近衛家所領維持の切り札であり、尚通は幕府と一体化することで近衛家存続を図ったのであろう。

尚通に限らず、京都の朝廷社会は、義晴近江没落以降、自力で堺側と交渉し所領確保に努めなければならなかったことが、『実隆公記』からも伺える。[37] 高国・義晴が京都から近江に退いた享禄元年以降、京都は将軍・京兆不在で、政府・治安維持組織がなく、自力で財産や身の安全を図らなければならない状態であった。そして、京都には、三好や柳本といった他国の陪臣軍が入れ替わり入京した。彼らの被官はさらに下級の者たちで、統制が十分に行き届いていたとは考え難い。強盗・放火が多発し、治安が悪化していた。

そのような状況の中で、近江に長らく滞在しているとはいえ、将軍義晴は、朝廷と交渉を持ち、公家もしばしば近江を尋ね、諸大名への栄典授与も行っており、義晴が唯一「公認の権威」と考えられていた。[38] 京都在住者は、不安定な情勢の中で翻弄されていたのであり、将軍の早期京都帰還は、天皇をはじめ他の公家達も待ち望むところだった。

一方義晴はというと、義晴の父義澄は伊豆の出身であるうえ、都を追われ、義晴生後間もなく船岡山合戦で京都を奪い返そうとしたが死去し、義晴は播磨に預けられ育った。義晴の母は身分が低く、唯一の肉親である異母兄義維は、四国に預けられ、この時将軍の地位を狙い、義晴と対立していたのである。義晴は信頼できる家族・肉親がいなかった。近衛家息女と結婚できれば、高貴な血筋を獲得でき、京都の最有力者と一族

になれる。義晴にとってもこの結婚は、自身の出身をカバーできる望ましいものだった。

第四節　結婚の失敗例

さて、木村真美子氏は、天文二年正月二十九日に九条稙通が関白宣下されると、近衛家と義晴が共同してこれを妨害したことから、天文元年以前に義晴と近衛家の連携が成立していたことは確実であるとしている。さらに、『後法成寺関白記』大永六年の紙背文書の、代々の将軍御台日野氏不快の例を書き上げた土代の存在から、尚通の息女を将軍に嫁がす計画は、高国存命中からあったのではないかとする。[39]

寺院入室の契約が幼少期になされることが多いことから推測すると、早くから慶寿院を義晴御台にと尚通が考えていたことは十分に考えられる。しかし、室町期は日野家から将軍御台が出るのが通例であり、摂関家から御台を出すことは先例がなかった。これを成功させるには、日野家御台不快の例を挙げるだけではなく、近衛家との婚姻が嘉例とならなければならなかった。

義晴には既に、大永五年（一五二五）に三条実香娘が上臈として嫁いでいた。しかし、この入室は当初から三条氏側が難色を示していた。三条実香娘は、後柏原天皇上臈三条公敦養女（実父大炊御門信量、公敦同母弟、大炊御門家を継ぐ）の跡継ぎとして内裏に入室する予定であった。朝廷の役職はその家が代々継承するのが原則であり、三条氏としては天皇上臈の役職を失いたくなかったのである。[40] しかし、当時日野家には適当な娘がいなかったため、義教期などで前例のある三条氏に義晴上臈の白羽の矢が立ったのである。

三条実香は、一時は養女を天皇上臈に入れようとまで考えたが、それも無益ということになり、天皇上臈は大炊御門経名の娘が継ぐことになってしまった。[41]『実隆公記』紙背文書には、実香の書状が残されており、娘を嫁がせる直前になっても「万々迷惑恐怖計候」[42]と述べている。

このことは娘にも影響したと思われ、大永七年二月義晴が近江に動座すると、実家にいた三条氏へ、佐子局から近江に来るよう書状が来たのだが、長光寺に行ったのはひと月以上たった三月末であった。[43] そして、六月には、『実隆公記』紙背文書の実香書状によれば次のような状態であった。[44]

局者殿中ニ候へ共、例虫所労間、此方へ可来之由申候へ共、何とも候へかし、いかやうにもはい□（りカ）候て、局ニあるハくるしからす候、此方へ儀ハ不可然候由申遣候間、殿中儀も不分明候、但今日堺御馬・太刀納候由、今朝書状候、何ともふきめき（不義）候躰ともとて候間、無覚束候、

実香娘[45]は腹痛のため、帰りたいと実香に訴えており、実香は「不可然」と答えながらも、殿中の様子が分からないと心配している。そして、堺の義維が朝廷へ馬・太刀を進上したと伝える書状があったと、先行きを心配している。結局、この直後に実隆が、京都で実香娘と瓜を食べていることから、実香娘は実家に戻ったことが確認できる。[46]

同年十月、実香は坂本の義晴の所へ行ったが、佐子局・宮内卿局の義晴乳母たちは、実香娘も坂本に来るように相談していた。しかし義晴は、当陣金宝寺は狭く不弁（便）である上に、近日上洛するので無用と答えた。実香は「安堵候」と実隆に伝えている。[47] 義晴は実香娘が坂本に来たくない

ことが分かっていたのだろう。その後、義晴が動座した桑実寺にも実香娘は同行していないことが確認できる。[48]家臣が全て将軍に随行する中で、妻である実香息女のみ随行しないのは、深刻な事態だといえるだろう。

義晴は無理な結婚は難しいと感じていたであろう。尚通も狭い京都の公家社会のことゆえ、三条実香娘が義晴に同行していないことは承知であったと思われる。前例のない近衛家からの入室を成功させるには、実家の後押しと本人の意思が大切であると考えたのではないだろうか。

たとえば、尚通嫡子近衛稙家の妻は細川尹賢弟高基の娘で、尚通の末子晴通が養子となっている久我家養女として近衛家に嫁いだ。高基は永正年間に頻繁に近衛邸を訪れ、双方の女性たちも交流があり、高基の妻が近衛家に泊まることもあった。[49]高基の娘と稙家は顔見知りであり、身分差を考慮すると恋愛結婚ではないかと思われるのである。

尚通は慶寿院が桑実寺に行くことによって、義晴や義晴周辺の人々が、いつまでも手狭な桑実寺にいるわけにはいかず、早期に京都復帰を目指すであろうこと、又、義晴と縁戚関係を持つことは、近衛家所領維持の上で有効と考えたのであろう。実際、慶寿院との結婚三週間後には、義晴は上洛のため桑実寺から坂本に移り、結婚三カ月後の九月に入京している。[50]

しかし、慶寿院を理屈で説得し、桑実寺に行かせることも可能だが、それは逆効果でさえある。先述したように、将軍御台は近衛家よりはるか格下の名家である日野家から出すのが慣例であり、摂関家から出す先例は無かった。まして、近江の一寺院まで嫁いでいくことは先例がない。慶寿院が仕方なく桑実寺に行くのでは、三条氏の二の舞になりかねないのである。問題は慶寿院の心をどう動かすかであった。

第五節　絵巻と結婚の関連について

さて、尚通は享禄四年十月に『当麻寺縁起絵巻』を当麻寺から取り寄せて六日間借りている。[51]この絵巻は享禄四年五月から八月にかけて『実隆公記』に制作の記事があり、『桑実寺縁起絵巻』の前年に制作された絵巻である。十月に実隆が奥書を書いているので、完成した絵巻を取り寄せたのであろう。

この絵巻は、上巻が当麻寺創建譚、中巻が中将姫の薄幸の物語、下巻が当麻曼荼羅織成縁起で、絵は土佐光茂が描いた。上巻は後奈良天皇・青蓮院尊鎮・梶井宮彦胤、中巻は近衛尚通・稙家・聖護院道増、下巻を三条西実隆・公条・公順が執筆した。当時最高の絵巻制作スタッフといえよう。

当麻寺僧宗胤が発願で、東大寺勧進聖祐全が実質的な推進役となって、実隆の所に度々訪れている。この絵巻は勧進のために制作されたのであろう。すなわち、当麻寺を宣伝し、当麻寺に行き当麻曼荼羅を拝んでみたいと思わせることが目的なのである。『桑実寺縁起絵巻』も瑠璃石の薬師如来の足跡を拝んでみたいと思わせる絵巻である。

また、『当麻寺縁起絵巻』も女性が主役の絵巻である。鑑賞者は薄幸な中将姫に自分を重ね合わせ、姫が出家を志す気持ちを自分のものと感じながら、最後に阿弥陀如来の来迎によって救われるのである。おそらく、六日間も借りているので、家族も『当麻寺縁起絵巻』を見たのであろう。そして、尚通は絵巻こそが娘の心を動かすものだと考えたのではないだろうか。『当麻寺縁起絵巻』ラストシーンは、阿弥陀来迎である。[52]『桑実寺縁起絵巻』のラストシーンは日光・月光菩薩が十二神将・

夜叉を従えて来る場面で終わり、「阿弥陀来迎図」と酷似しているのである。

『当麻寺縁起絵巻』を返却した翌日、先述したように上池院が近衛邸に来ている。上池院に法楽詠歌を尚通が遣わし、上池院はそれに応えて短冊を持ってきた。いわば、尚通が上池院を呼んだのである。この時尚通が上池院に書き遣わした「次第裏書」とは、『桑実寺縁起絵巻』制作に関する指示だったのではないだろうか。そして、上池院と尚通が相談し、慶寿院のために、『桑実寺縁起絵巻』制作を正月参賀の折に、義晴に持ちかけたのではないだろうか。飯川の書状は正月十七日の日付であった。十五日を過ぎ、正月行事が一段落し、他の客がいない時期を見計らって行ったのであろう。こうしたことは、突然押しかけ話を切り出すよりも、自然な形でさりげなく持ちかけたほうが受け入れられやすいのである。

むろん、『後法成寺関白記』にも『実隆公記』にもそのようなことは一切書いてない。しかし、公家日記は家の記録として書いているのであり、子孫に伝える為の記録なのである。そのために、現在まで大切に保管され、写されてきた。つまり、人が見ることを想定して書かれているのであり、本当に大切なことや秘密に属することは書いていないのである。

加えて、尚通は北条氏綱が注文し、享禄四年（一五三一）に完成した『酒伝童子絵巻』（サントリー美術館蔵）の詞書を書いている。大永二年（一五二二）高国存命中に尚通が上巻詞書を執筆し、九年後の享禄四年、三条西実隆が、三巻分の奥書を氏綱の依頼によって書いた。

そして、この『酒伝童子絵巻』を三条西実隆は、享禄四年六月二十二日条で「北藤絵」としている。この意味が不明なのだが、「北藤」は北条氏に嫁ぐ近衛氏の事かとされている。[53] この説を補強する史料がある。「為和集」天文二年三月晦日に、次のようにある。[54]

いへはえにみなれぬ花の朝こちに　なひくもしるき北の藤なみ 有注

右有注とかき侍るは、氏綱女中は近衛殿関白殿御姉にてましますか、御内縁になられける間、かくよみ侍り、ことにかの女中にての会也、

近衛稙家姉が北条氏綱の後妻なのでこのように詠んだ。この藤見の歌会は彼女のためとしている。「北藤絵」は北条氏に嫁ぐ近衛氏のための絵だろう。天文元年に北条より多くの進物が近衛家に届いており、[55] 正受寺が氏綱に嫁いだと思われる。近衛家息女の結婚前に、婿側が絵巻を調えた前例として注目される。

内容は、鬼に捕らわれていた姫達を源頼光・坂田金時等が助け出す話である。当時すでに足柄山と金時の伝説が流布していたために、足柄山に隣接した小田原の北条氏が絵巻を制作したのかもしれない。当初から正受寺のために制作されたのか、正受寺のために、新たに奥書を付け加えたのか不明である。

なお、この『酒伝童子絵巻』は後に、北条氏直に嫁いだ徳川家康娘良正院が小田原陥落後池田輝政に再嫁し、その際池田家に持参し、鳥取池田家に伝来した。代々北条家当主の妻に相伝された絵巻だったのであろう。この点からも、『酒伝童子絵巻』は北条氏に嫁ぐ慶寿院姉のために、奥書を新調し体裁が整えられたと考えられるのである。つまり、「都の高貴な女性が小田原に来る→奥書が揃う→不完全だった絵巻が完全な形に整う」のである。これは、「小田原」「絵巻」を「桑実寺」に、「奥書」を「日光・月光菩薩」に変えれば、『桑実寺縁起絵巻』で三条西実隆が

創作した部分と同じなのである。

第六節　縁談の経緯

【制作の経緯】

さて、その後の制作過程と慶寿院縁談を考えよう。

①二月十五日に詞書き草案が義晴の意に叶ったと実隆に返事が来ており、直ちに絵画制作が始まったと考えられる。

②六月二十三日に外題・中書等悉く土佐光茂に渡され、ほぼ完成に近かった。『当麻寺縁起絵巻』の場合、享禄四年八月十一日に下巻の詞書を祐全に渡し、八月二十二日に絵巻が完成している。[56]『桑実寺縁起絵巻』も七月初めには完成したと考えられる。まず、後奈良天皇、尊鎮法親王に見せたのであろう。

③天文元年八月十七日桑実寺に絵巻が奉納され、この間一ヵ月半の空白がある。

④この空白期間である七月二十八日上池院が近衛家を訪れ、八月九日に桑実寺より近衛家に使者が来ている。そして、絵巻奉納日の前日八月十六日にも上池院が近衛邸に来ている。

⑤慶寿院結婚の幕府側の交渉相手として、佐子局が考えられる。佐子局は、先述したように、義晴母親代りともいうべき存在で、近衛尚通と度々音信をしている幕府の重臣であり、近衛家担当取次であったと思われる。

具体的には、八月九日に「去夜従左五局岸部来、種々申子細有之」[57]、天文二年正月二十三日「従御佐子局有御返事」[58]天文二年九月「御左五局江（酉）アカ子小袖遣之」[59]とある。八月九日に佐子局からの使者が来訪し色々と相談することがあり、返事が翌年の正月に届いた。そして、天文二年九月に小袖を佐子局に贈った。書状ではなく、使者が近衛邸に訪れ相談していること、返事が届くまで五ヵ月かかっていること、それまでの両者間の贈答はほとんどが食物であるが、この場合のみ小袖を贈っていることを勘案すると、佐子局との間で、慶寿院嫁入りの事が相談されたのではないだろうか。

⑥天文二年十一月桑実寺より使節が上洛している。[60]この使節は正式に婚約が整った使者と見てよいだろう。

⑦『桑実寺縁起絵巻』が奉納されてから、慶寿院が桑実寺に嫁ぐ天文三年六月八日まで、一年九ヵ月余りの日数がかかっているが、慶寿院の婚礼の行列は「ゆゆしく美麗」であったと『お湯殿の上の日記』に記されている。[61]多くの嫁入り道具を持参し、乳母をはじめ多くの慶寿院付き家臣も桑実寺に来たのであろう。別稿で論じたように屏風の制作には一年九ヶ月かかっている。[62]将軍御台に相応しい嫁入り道具を新調するのに、その程度の日数が必要だったのであろう。

当時、義晴は桑実寺の正覚院にいた。[63]院家を間借りしている義晴の許に、多くの豪華な嫁入り道具と家臣を引き連れ嫁入りすることで、いつまでも手狭な桑実寺にいるわけにはいかず、早期京都帰還を目指すであろうことを、近衛尚通は狙ったのではないだろうか。

【絵巻の披見】

次に、『桑実寺縁起絵巻』が近衛家で披見された可能性について検討することが必要だろう。絵巻は宝物であり、誰でも見ることができたわけではない。『桑実寺縁起絵巻』も奉納後は秘蔵され、桑実寺来訪者以外の目に触れることはなかったと思われる。

まず絵巻披見の例を検討したい。『道成寺縁起絵巻』（和歌山県道成寺蔵　室町時代）には、足利義昭の花押が据えられている。天正元年

（一五七三）将軍足利義昭が、織田信長に敗れ紀伊に滞在した時、この絵巻を取り寄せ見たことを証明するために花押が据えられた。絵巻は秘蔵される一方で、高貴な人に見てもらうことで、よりその価値を高めたのである。

また、『古今著聞集』巻十一画図十六によれば、後白河法皇が『年中行事絵巻』を藤原基房に見せたところ、誤描写箇所に自筆の押紙を付けて返進された。これを見て後白河法皇は、このことによりこの絵巻は重宝になったと、絵を直さず押紙をそのままにし、蓮華王院の宝蔵に秘蔵した。

くわえて、中国の画巻などには、いたるところに所蔵印や題跋が書かれたものがあり、それがその作品の価値をより一層高めている。知識人や著名人の所蔵や披見の記録が、その絵画の価値をより一層高めるのである。

『実隆公記』には絵巻を見た記事や、銘や外題・奥書を書いた記事が多くある。[64] 公家は家記として日記を書いたのであり、公家日記は後世に伝えるために書かれている。そして、公家日記は秘蔵されるばかりでなく、貸し出され書写される。[65] つまり、絵巻制作・鑑賞の第一人者に見てもらう、書いてもらうことで、冊子や絵巻の価値が高まるのみならず、冊子や絵巻の記録が都に残るのである。絵巻披見は特権であると同時に、見せる側にもメリットがあったとみるべきだろう。

特に、『桑実寺縁起絵巻』は、将軍注文、天皇宸筆、土佐光茂筆、三条西実隆作・奥書の最高級絵巻である。ほとんど人目に触れることなく、ひっそりと桑実寺に奉納されたのではなく、都でしかるべき人が披見し、奉納されたとみてよいだろう。世に知られることなく秘蔵された絵巻は、無名の絵巻にすぎないのである。義晴が絵巻を見せたかったのは、都の人だろう。

抑々、寺社縁起絵巻は秘蔵することが目的ではなく、多くの場合勧進が目的である。しかるべき有力者に見せることによって、勧進の目的を果たせるのである。例えば、『道成寺縁起絵巻』は巻尾に、義昭が絵巻を見て、末代の禄を仰せ出されたが、太刀一腰、馬一疋のみであったと書き加えられている。本来は禄を賜るのだが、流浪中の義昭は口約束だけであった。しかしそれでも、太刀・馬は貰っている。

さらには、『当麻寺縁起絵巻』の直後に制作され、ほぼ同スタッフで制作された将軍注文の絵巻を、近衛家が全く知らなかったとは考え難い。むしろ、『当麻寺縁起絵巻』で、上巻を天皇一族、中巻を近衛一族、下巻を三条西一族が分担しながら、続けて制作された『桑実寺縁起絵巻』に近衛一族のみが全く参加しないということは、あたかも、近衛家を無視したかのようで不自然なのである。

尚通は実隆と並ぶ当時最高の知識人であるのみならず、実隆より身分が上の前太政大臣・前関白・准三后で、公家社会の頂点にいる。そして、現在判っているだけでも『清水寺縁起絵巻』『酒伝童子絵巻』『当麻寺縁起絵巻』『長谷寺縁起絵巻』と、戦国期を代表する絵巻制作に深くかかわっている絵巻制作の第一人者である。朝廷内の身分秩序から考えると、発願者の依頼を受ける絵巻制作現場監督が三条西実隆、摂関家の尚通はそれをより高い立場から補佐・報告を受ける関白、天皇は場合によっては宸筆を加え、報告を受ける王の立場であろう。尚通が、天皇や実隆が見ている将軍注文・宸筆の『桑実寺縁起絵巻』を知らなかったとあっては、面目にかかわるのである。尚通は『桑実寺縁起絵巻』を見ているであろう。

くわえて、公家間の絵画披見は多くの例がある。『実隆公記』には、

永正三年に朝倉貞景注文、土佐光信筆の「京中の屏風」を甘露寺元長が三条西実隆に見せたことが記されている。[66]『守光公記』には、永正十年に後土御門天皇が守光に仰せ下されたのは、「細川高国が『鞍馬寺縁起絵』を新写させ、狩野元信筆、青蓮院尊応が絵詞を書いた、未だ外題がない」ということだった。守光は叡覧を申し入れたいと天皇が思っているのだろうか、徳大寺実淳はすでに見たと記した。[67]『中院通村日記』には、元和二年、狩野興以より、他所から依頼された大阪の陣図屏風を見て欲しいと依頼があり、後水尾天皇にも見せたことが記されている。[68]

つまり、公家は朝廷の構成員であり緊密な連携・役割がある。『桑実寺縁起絵巻』制作を三条西実隆個人の仕事と考えるべきではなく、朝廷社会における絵画制作・鑑賞という枠組みで考える必要がある。文化・伝統の継承が朝廷社会の役割である。絵画鑑賞・制作への公家・天皇の参加は、小遣い稼ぎや、個人的趣味ではなく、文化・伝統の継承を担う朝廷社会の役割の一環であり、公家の教養・技能が絵画制作の水準を支えていたのである。

なお、『実隆公記』は天文元年七・八月が欠損しているので、絵巻を桑実寺に届けた人物が不明なのだが、この時代はある事件を最初に担当した者が、最後までその件に関しての担当者であることからすると、依頼の書状を届けた上池院が『桑実寺縁起絵巻』を近江に届けたのかもしれない。先述したように、絵巻奉納日前日に、上池院は近衛家に来ている。

まとめると、奉納以前に京都で、慶寿院が絵巻を見ていた可能性が高い。現在『桑実寺縁起絵巻』の制作目的を、亀井若菜氏は「たとえ近江の一寺院にあっても、義晴は、天皇と共に中央の権力者として正統的立場にいるのだ」[69]ということを感じさせるためであるとする。また吉田友之氏は、足利義晴が畿内諸勢力の調伏を祈願し、ラストシーンの十二神将の飛来は将軍擁護の軍勢の到来を告げるがごとくであるとする。[70]このような従来の解釈によれば、義晴はあえてこのような絵巻を制作しなければならないほど、将軍としての地位に不安を持ち、『桑実寺縁起絵巻』は義晴の空しい願い・焦りが込められた作品ということになる。

だが、義晴が正統な将軍と、朝廷も多くの守護も考えていた。そして、細川晴元と義晴は連携しており、義維を積極的に支持する勢力は、陪臣である三好元長と義就流の畠山義堯のみであった。しかも、義堯の中心的軍事力であった木澤長政は晴元についており、義維将軍就任は望めない状況であった。そうした中で、あえてそのような絵巻を制作することは、むしろ義晴の不安を露呈させるだけである。

また、義晴が京都復帰を願っていたことは間違いないが、桑実寺が政治的中心地、疑似都であることを主張することにどれだけの意味があるのだろうか。そのようなことをしても、桑実寺が近江の山寺であることに変わりはなく、京都ではないことは明らかなのである。

坂本の義晴を三条実香が訪ねた際、義晴は滞在する金宝寺を「陣」としている。[71]桑実寺も「陣」であり、一時的に都を離れ、仮に滞在している場所と考えていたとみてよいだろう。桑実寺はあくまでも一時動座している場所に過ぎず、またそうであらねばならないのである。さらには、その後も義晴・義輝・義昭は、京都以外の地に度々動座し、寺を御座所としているが、桑実寺以外に絵巻を制作させた例はない。将軍の御座所を聖地化・疑似都化する必要があるならば、その後もこうした絵巻が制作されるであろう。

しかし、『桑実寺縁起絵巻』を、京都で慶寿院が見ていたとすれば、観音正寺や豊浦庄の描写によって見知らぬ土地に嫁ぐ女性の不安を和らげ、藤原氏ゆかりの桑実寺に、都の高貴な女性が後からやってくるとい

う、美しく高価な絵巻を制作してくれた義晴の思いに勇気づけられ、桑実寺へ行く決心をする絵巻だったといえる。そして、この絵巻には、額田女王と大海人皇子の「茜射す紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖振る」「紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも」の恋歌が隠されているのである。

巻頭場面は、桑の大樹（将軍）のもとに、太陽と月が揃うことを暗示し、ラストシーンは、元明天皇（乙姫）が桑実寺に自らの意思で後から来ることによって、雉の番いが桑実山に揃い、太陽と月が桑実寺に揃い、桑実寺が完全な姿になるところで終わる。この絵巻は、末娘で乙姫である慶寿院への恋文と考えられるのである。

また慶寿院は、父がこの絵巻制作の黒幕で、上池院が実行者であることも、読み解いたであろう。父がこのような絵巻を制作してまで、慶寿院に桑実寺へ行き、義晴と結婚してほしいと望んでいること、しかし、決して無理強いするのではなく、慶寿院に深い愛情をかけていることを感じたであろう。

ちなみに、絵巻上巻ラストシーンは唐突に天智天皇所縁の唐崎の松が登場する。尚通はほとんど京都から出たことはないが、天文元年三月二十七日に、唐崎の松を見物している。唐崎の松は尚通所縁の名所である。

さらには、この絵巻制作に、三条西実隆や天皇・尊鎮法親王も協力しているのである。慶寿院が桑実寺に行き、義晴に早期帰京を促し、公家との太いパイプ役となることは、朝廷社会の総意であり、京都を救うことである。この絵巻を見て、慶寿院は桑実寺に行く決心をしたのであろう。

【過去と現在、現実と物語の融合】

さて、尚通の諡号は「後法成寺」であり、そこから尚通の日記は『後法成寺関白記』と呼ばれている。「法成寺」は藤原道長が建立した寺であり、道長の日記は『御堂関白記』とも『法成寺摂政記』とも呼ばれる。尚通の父政家の諡号は「後法興院」で、法興院は道長の父藤原兼家のことである。多くの藤原氏の中で、尚通に「後法成寺」の名が与えられたのは、一条天皇中宮彰子をはじめ娘を天皇の后とし、藤原氏全盛期を築いた道長に、尚通を擬えたものと考えられる。尚通は、政家に「後法興院」の名が与えられた時点ですでに、自身を道長になぞらえていたのではないだろうか。近衛家は『御堂関白記』を相伝し、摂関家の中でも道長直系の家なのである。

また、実隆の絵詞は、中宮彰子のサロンにいる和漢の典籍に通暁した紫式部に向けて書いたのではないかと思われるほど、難解な言葉を駆使している。紫式部は光源氏最愛の妻「紫の上」からこのように呼ばれた。また、『源氏物語』は『紫のゆかり』『紫の物語』ともよばれている。『源氏物語』の第一読者は彰子であろう。彰子は「紫の草子のにほへる妹」なのである。

『桑実寺縁起絵巻』の阿閦皇女の部屋は女房衆が詰め、源氏絵の世界である。これは、中宮彰子のサロンをイメージし、この絵巻は「紫の草子（紫草）のにほへる妹」道長娘彰子（尚通娘慶寿院）のために制作されたことを表しているのではないだろうか。

絵巻の中で、上巻巻頭の伝説世界・観音正寺の現実世界・阿閦皇女寝室の物語世界が、下巻の桑実寺で一つに融合している。この絵巻は、過去の中宮彰子や額田女王、現実の慶寿院、物語の中の元明天皇が、『桑実寺縁起絵巻』の中で一人に融合しているのである。

『源氏物語』は物語の登場人物の姿を借りながら、現実の女性の生きざまを描いている。源氏物語に登場する女性は、現実の女性の「たとえ話」である。鑑賞者は、物語の女性たちにわが身を重ねるからこそ、深い感動が生まれ読み継がれてきた。「たとえ話」は仏典にも多く見られ、『当麻寺縁起絵巻』も中将姫の姿を借りて現世の人に当麻曼荼羅信仰を説いている。「たとえ話」は、公家にはよく慣れ親しんだ表現なのである。『桑実寺縁起絵巻』も元明天皇の姿を借り、現実の慶寿院の「たとえ話」を描いているのである。

おわりに

慶寿院結婚の具体化は、細川晴元は義晴との連携を考えており、細川高国が死んだ以上障害はなくなり、義晴の京都復帰が可能と見た尚通の戦略であろう。だが、将軍御台は摂関家より格下の日野家から出るのが室町期の通例であり、摂関家から輿入れすることは先例のないことだった。それを成功させるには、近衛家の全面的なバックアップと共に、慶寿院自身が義晴の許に嫁ぐ決心をすることが重要だと尚通は考えたのであろう。義晴以前の将軍は三代続けて京都以外の地で死んでいた。また、義晴自身も近江にいた。武家に嫁ぐことは、どのような事態が起こるとも知れず、覚悟のいることなのである。

とはいえ、慶寿院が桑実寺に行くことは、義晴の早期京都復帰を促すことになり、近衛家のみならず、京都を救うのである。また、唯一の肉親である義維に将軍職を狙われ、妻三条氏ともうまくいっていない義晴にとっては、心強い家族を得ることなのである。さらに、まだ男子のいない義晴に近衛家の血を引く男子が誕生し、孫が将軍になれば、近衛家所領維持にとって有力な後ろ盾となる。

実際、慶寿院は結婚後、義輝・義昭・入江殿と子宝に恵まれ、義晴に従い度々近江に没落するなど苦楽を共にし、義晴死後は後見役として義輝を支えたが、最後は義輝と共に三好に殺されるのである。おそらく、慶寿院の姉正受寺が北条氏綱に天文元年に嫁いだことも、慶寿院の決心に影響を与えたであろう。関東に嫁ぐことに比べれば、近江に行くことなど厭うに足らない。

この絵巻は都の高貴な乙姫が「後から寺に来る」と、太陽と月が桑実寺に揃い、不完全だった桑実寺が完全な形になると説いている。慶寿院は末娘であり、乙姫なのである。『桑実寺縁起絵巻』は自分のために作られたことを、慶寿院は読み解いたであろう。また、元明天皇の父天智天皇は寺建立の指示をしたこの物語の発願者だが、表舞台に登場しない黒幕である。この絵巻は父が黒幕であることを慶寿院は見抜いたであろう。

さらに、この絵巻には隠された恋歌があることも理解したであろう。そして、桑実寺に繰り広げられた世界は、慶寿院を取り囲む人々であることにも気づいたであろう。しかし、それが現実の桑実寺だと思ったのではなく、この絵巻を制作してくれた義晴の思い、父の思いを考えたことであろう。

くわえて、父に呼ばれた実行役定恵が上池院であり、天智天皇の指示により標野を作り、二人を見守る野守が、絵巻制作にあたった三条西実隆や土佐光茂であることも理解したのではないだろうか。さらには、後奈良天皇や青蓮院尊鎮法親王も協力しているのである。周りの人々や父や将軍が、ここまで自分のために考えて制作してくれた絵巻をみて、慶寿院は波乱の人生に踏み出す決心をしたのであろう。そして、この後近

衛家は一族を挙げて慶寿院を守っていくのである。

近衛家は他の摂家が困窮し、在国を余儀なくされ衰退する中、戦国期においても在京を維持し、官位も最高位についている。武家への接近は戦国期公家にとって生き延びる手段だった。公家の生き残り策を検討する上でも、『桑実寺縁起絵巻』は重要である。

『桑実寺縁起絵巻』は恋文であり、室町幕府・京都を守ろうとした義晴・慶寿院夫妻のスタートなのである。絵巻は神仏に奉納される場合でも、鑑賞者を想定して制作されるのではないだろうか。絵巻は秘蔵される一方で、見るべき人に見てもらうからこそ、名声を得、重宝となる。絵巻研究には、「鑑賞者」という視点が必要だと考える。

ただし、表向きは世話になった桑実寺への御礼、神仏への祈願として絵巻が制作されたのであるから、従来の解釈が全く間違いということではない。むしろ、意図的に難解な詞書にし、さらに絵の細部まで気を付けないと、絵巻の真意がわからないようにしている。つまり、絵巻は奉納後参詣者にも公開される。細部まで注意して絵巻を見直すことができ、かつ、公家クラスの仏典・古典・歴史・地理的素養がないと読み解けないよう、意図的に作られているのである。

しかし、普通の人が見ても、上巻第一段の桑の大樹や観音正寺、下巻巻頭の豊浦荘は本筋とは無関係に見える場面選択である。また、阿閑皇女寝室が源氏絵の世界であること、桑実寺が都世界になっていること、七光寺建立は盛大だが、桑実寺建立は質素であること、定恵が突然来て桑実寺を建立すること、下巻で桑実寺が二度描かれること等、なんとなく変だと感じる部分がある。実は、それこそが絵巻の真意を読み解く鍵なのである。『桑実寺縁起絵巻』は「たとえ話」であり、元明天皇の姿を借りて、慶寿院に桑実寺へ行くことを促している。

最後に、中世以前の絵画は、「見たもの」や「個人の構想」を描いているのではなく、文学的・歴史的素材を描いている。中世絵画を写生画・構想画と見るのは、近現代的芸術観で解釈しているのではないだろうか。くわえて、注文者から制作目的を推測するのは、危険な方法である。絵巻そのものの主題から制作目的を明らかにするべきだろう。絵・詞書や関連文献を分析し、当時の主な鑑賞者である公家の教養・常識で、主題を解釈する必要があるだろう。公家文化は「表向き」の裏に、真意が隠されていることがあり、それを読み解くのが「美（をかし）」なのではないだろうか。絵は虚構を描くが、虚構の中にメッセージが込められているのである。

注

（1）『日本記略』第一、前編上　元明天皇（国史大系）吉川弘文館、一九七九年。藤井譲治・吉岡眞之監修『持統天皇実録・文武天皇実録・元明天皇実録・元正天皇実録・聖武天皇実録』（『天皇皇族実録』6）、ゆまに書房、二〇〇八年。

（2）黒島敏「山伏と将軍と戦国大名」（『年報中世史研究』二九、二〇〇四年）。湯川敏治「足利義晴将軍期の近衛家の動向」（『日本歴史』六〇四、一九九八年）。高梨真行「将軍足利義輝の側近衆」（『立正史学』八四、一九九八年）。

（3）島谷弘幸「「桑実寺縁起」と三条西実隆」（『続日本絵巻大成一三　桑実寺縁起　道成寺縁起』中央公論社、一九八二年）。『古筆学拾穂抄』木耳社、一九九七年に再掲。

（4）『実隆公記』享禄五年正月二十一日条。

（5）設楽薫「将軍足利義晴期における「内談衆」の成立（前編）―享禄四年「披露事条々」の検討を出発点として―」（『室町時代研究』一、二〇〇二年）五一頁。

（6）山田康弘『戦国期室町幕府と将軍』吉川弘文館、二〇〇〇年、一二四頁、脚注73。

(7) 設楽氏は「以福」を入道名とするが、小松茂美氏は「福有（福祐）状」転じて「幸便」とする。山田康弘氏の御教示によれば『室町幕府文書集成奉行人奉書編』三三七四号に「飯川山城入道以福」とあるので入道名である。『実隆公記』大永八年五月二十二日条に「飯川山城国弘」とあるので、国弘と改名したものと思われる。

(8) 『実隆公記』巻七、大永八年三月夏七月紙背文書、三月二十三日至二十五日、同二十一日二十二日裏、二五九頁。

(9) 「永禄六年諸役人附」（『群書類従』二十九輯、雑部）。

(10) 設楽薫「足利義材の没落と将軍直臣団」（『日本史研究』三〇一、一九八七年）。「光源院殿御元服記」、「祇園会御見物御成記」（群書類従二十二輯武家部）。

(11) 「前大納言為広卿詠草」（続群書類従十六輯上和歌部）。前掲注（6）山田著書、一二四頁、脚注73。

(12) 『実隆公記』大永八年五月十・二十二・二十三・二十六・二十七日条。

(13) 『実隆公記』大永二年四月二十一日条。

(14) 『後法成寺関白記』享禄元年二月三日、四月九・二十七日、五月十八・二十一・二十二・二十七日条。

(15) 服部敏良『室町安土桃山時代医学史の研究』吉川弘文館、一九七一年、三一四～三一九頁。

(16) 『実隆公記』享禄五年二月三日条。

(17) 「華頂要略附録」巻四十二、勧縁集、東京大学史料編纂所所蔵謄写本。

(18) 『近江蒲生郡志』七、滋賀県蒲生郡役所、一九二二年。

(19) 「旧雑譬喩経」（本縁部）（大正新脩大蔵経）。

(20) 広岡義隆「佛足石記・佛足石歌碑本文影復元」（『三重大学日本語学文学』一、一九九〇年）。井上通泰「付録　佛足石歌新考」（『万葉集新考』八巻、第五、国民図書、一九二八年、二七三九～二七六一頁（国立国会図書館デジタルコレクション）。井上氏は、佛足石は当初から薬師寺にあったもので、「拾遺集」がこの歌を光明皇后の作とするのは、口伝によるもので、信用できないとする。

(21) 馬部隆弘「「堺公方」期の京都支配と柳本賢治」（『ヒストリア』二四七号、二〇一四年）。

(22) 小谷利明「畠山稙長の動向」（矢田俊文編『戦国期の権力と文書』高志書院、二〇〇四年）。

(23) 『大館常興日記』三、紙背文書、一一七頁（天文九年三月十四～十六日条関連文書）。

(24) 『後法成寺関白記』享禄二年七月十二日条。

(25) 『上杉家文書』三六九・三七〇・三七五・三七六・三八三・三八四号。

(26) 『後法成寺関白記』享禄元年二月十三日、三月六日、五月一・三十日、六月八・二十三日、八月二十八日、十一月四日、享禄二年正月二十三日、六月二十六日、十月九日、享禄三年正月二十日、九月二十六日、享禄四年五月十日、天文元年正月二十五日条。

(27) 同書、享禄二年十月二十一日条。

(28) 同書、享禄三年十月二十九日、十一月三十日条。

(29) 同書、享禄四年十一月二十六日、天文二年正月二十九日条。

(30) 同書、享禄三年二月十六日、享禄四年三月二十八日、七月五日、九月十三日、天文元年四月二十六日、十二月二十一日条。

(31) 柴田真一「近衛尚通とその家族」（『戦国期公家社会の諸様相』和泉書院一九九二年）。『後法成寺関白記』享禄四年七月五日、天文元年四月二十六日条。長塚孝「関東足利氏と小田原北条氏」（天野忠幸編『松永久秀』宮帯出版社、二〇一七年）。

(32) 『島津家文書』（大日本古文書）六五五号。

(33) 『後法成寺関白記』享禄四年十二月十三・十四日条。

(34) 同書、天文二年三月二十二日・二十三日、四月十四日、天文五年二月二十七・二十八日、十月八日条。

(35) 同書、天文五年二月二十四日条。

(36) 中世公家日記研究会編『戦国期公家社会の諸様相』和泉書院、一九九二年、巻末第一表戦国期近衛家領表。

(37) 『実隆公記』享禄二年十一月二十九日、十二月十日条、享禄四年五月七～十一日紙背実隆書状案、享禄四年五月二十六～二十八日、同二十一～二十五日紙背実隆書状案。

(38) 二木謙一『中世武家儀礼の研究』吉川弘文館、一九八五年、四〇七頁。西島太郎「足利義晴期の政治構造」（『日本史研究』四五三、二〇〇〇年）。
(39) 木村真美子「大覚寺義俊の活動と近衛家」（『室町時代研究』三、二〇一一年）。
(40) 吉野芳恵「室町時代の禁裏の上臈」（『國學院雑誌』八五―二、一九八四年）。
(41)『二水記』大永六年四月二十九日条。『実隆公記』大永五年八月九・二十一・二十七日、九月七・十日、十二月十一・十三日条。奥野高廣『戦国時代の宮廷生活』続群書類従完成会、二〇〇四年、一二八・一三〇頁。
(42)『実隆公記』大永六年九月一～四日条紙背文書。
(43)『公頼卿日々記』（国立公文書館蔵写本）大永七年二月二十日、三月二十六日、六月六日条。
(44)『実隆公記』享禄元年冬紙背文書、巻七、三六六頁。
(45) 実香娘の名を「杏子」としている研究があるが、これは『実隆公記』享禄四年閏五月十日条「一対局杏子一蓋被送之」を誤読したもので、「杏子」は実香娘名前ではなく、果物「あんず」である。
(46)『実隆公記』大永七年六月二十五日条。
(47)『実隆公記』大永八年三月夏七月紙背文書、巻七、二五九頁。
(48)「江州於桑実御台様むかへニ御祝目六」国立公文書館蔵写本。
(49)『後法成寺関白記』永正十四年閏十月九日条。
(50)「厳助往年記」天文三年六月二十九日条。『お湯殿の上の日記』同年年九月三日条。
(51)『後法成寺関白記』享禄四年十月四・九日条。
(52) 本絵巻最終段の迎講図は、南都絵所芝座琳賢筆だと思われ、寺の要望で絵巻完成後付け加えられた。（『実隆公記』享禄五年正月十五日条。『絵巻マニア列伝』サントリー美術館、二二四頁）。
(53) 榊原悟「サントリー美術館本『酒傳童子絵巻』をめぐって（上）・（下）」（『國華』一〇七六・一〇七七号、一九八四年）。『絵巻マニア列伝』サントリー美術館、二〇一七年、二二三頁。
(54) 和歌史研究会編「為和集」（『私家集大成』七、中世5上、明治書院、一九七六年）一五〇三番。前掲注（31）柴田論文。
(55)『後法成寺関白記』天文元年四月二十六日条。
(56)『実隆公記』享禄四年八月十・二十二日条。
(57)『後法成寺関白記』天文元年八月九日条。
(58)『後法成寺関白記』天文二年正月二十三日条。
(59)『後法成寺関白記』天文二年九月十七日条。
(60)『後法成寺関白記』天文二年十一月二十三日条。
(61)『お湯殿の上の日記』天文三年六月八日条。
(62)『実隆公記』享禄二年三月四日条、享禄三年十二月六・七日条。拙稿「歴博甲本洛中洛外図屏風に描かれた歌絵」（『史艸』五五、二〇一四年）。
(63) 桑実寺住職北川隆啓『桑実寺遷史』桑実寺、一九八九年、二一頁。
(64) 島谷弘幸『古筆学拾穂抄』木耳社、一九九七年、三七七～三九一頁。
(65) 松薗斉『日記の家』吉川弘文館、一九九七年、一八〇～一八五頁。『守光公記』永正九年正月二十九日条。
(66)『実隆公記』永正三年十二月二十二日条。
(67)『守光公記』永正十年八月十二日条。
(68)『中院通村日記』元和二年四月二十一・二十二日条。
(69) 亀井若菜『表象としての美術、言説としての美術史』ブリュッケ、二〇〇三年、一四五頁。
(70) 吉田友之「「桑実寺縁起絵」の制作」（『続日本絵巻大成』十三、中央公論社、一九八二年）。
(71)『実隆公記』大永八年三月夏七月紙背文書、巻七、二五九頁。

（二〇一七年博士課程後期修了　学術研究員）

〔付記〕本稿は出光文化福祉財団調査・研究助成による成果である。

Kuwanomidera Engi Emaki and the Wedding with Keiju-in (2)

KOTANI Ryoko

[Abstract] Looking at the period when the *Kuwanomidera Engi Emaki* [Illustrated Handscroll of the Origins of Kuwanomi Temple] was created, this study examines the movements of the high-ranking court nobles Sanjonishi Sanetaka (1455-1537) and Konoe Hisamichi (1472-1544) in conjunction with the production and appreciation of illustrated handscrolls in imperial court society in the capital city, Kyoto. Sanjonishi Sanetaka took the existing account of the origins of Kuwanomi Temple, which looks back to the time of Empress Genmei (661-721), and framed it as a story about a fictional temple called Nanako-ji. Then, in the final scroll, the narrative returns to the pattern of historical events, reversing the order of the fictionalized narrative and culminating with a visit to Kuwanomi Temple by the Empress Genmei, which is accompanied by miraculous events.

At that time, civil disorder in Kyoto was on the rise in the absence of the shogun (ruler of the military government), to the extent that even the households of the regents and advisors to the court had no choice but to abandon the capital city. Konoe Hisamichi sought to gain protection for Kyoto and for the Konoe family by dispatching Keiju-in to be wed to the Shogun Yoshiharu, who had sequestered himself at Kuwanomi Temple, away from the strife. Hisamichi's maneuver was intended to induce Yoshiharu to return to Kyoto sooner. The marriage to Keiju-in was desirable for Yoshiharu, as well, but there was no precedent for a woman from the high lineage of the regents and advisors to travel away from the capital for a wedding at a temple in the relatively distant province of Omi.

What Hisamichi is thought to have done, therefore, is to suggest to the Shogun Yoshiharu that an illustrated handscroll be created that would make Keiju-in want to go to Kuwanomi Temple of her own will. In the handscroll, the palace of the protagonist Empress Genmei (Princess Ahe) is depicted like the realm found in paintings based on the *Tale of Genji* (Genji monogatari), and the women who appear in this *Tale of Genji* realm are allegorical representations of actual women. The handscroll borrows the figure of the Empress Genmei from the distant past and presents it in an allegorical manner suggesting that for the actual Keiju-in to go to Kuwanomi Temple would be to bring about the miraculous manifestation of sun and moon bodhisattvas together there, as had occurred in events connected with the temple's origin.

Illustrated handscrolls were closely held as treasured objects, but it is also known that the emperor and court nobles in Kyoto viewed such works. The highly placed Konoe Hisamichi was the preeminent figure in the creation of illustrated handscrolls. Despite this, the *Kuwanomidera Engi Emaki* is the one handscroll whose production he did not participate in. That is contrary to expectation, however, considering that this was a first-rate illustrated handscroll commissioned by the shogun and written by the emperor. It appears

reasonable to conclude that the production of this handscroll was not undertaken as a personal order from Sanjonishi Sanetaka, but rather as a project of the imperial court. The *Kuwanomidera Engi Emaki* was a love letter, a maneuver of courtship, and no doubt the true purpose in creating it was so that it could be shown to Keiju-in. This illustrated handscroll was the starting point for the union of Yoshiharu and Keiju-in, the husband and wife who sought to keep the capital city Kyoto safe.

[Key Words] *Kuwanomidera Engi Emaki*, Ashikaga Yoshiharu, Konoe Hisamichi, Keiju-in, Sanjonishi Sanetaka